

発行所 (郵便番号100)

東京都千代田区丸の内2-4-1
丸の内ビルディング617号室
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel (3212) 4007・1480
Fax (3212) 1447

編集責任者 岡 沢 憲 美

印刷所 関東図書株式会社
定価200円 (年間購読料参千円)

1991年12月25日発行

第 23 卷 第 12 号

(毎月1回25日発行)

昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol. 24 No.1

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
Marunouchi-Bldg., No.617, Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan.

新年の御挨拶

Message for The New Year

研究所理事長 西村光夫

Chairman of the board of Directors, Prof. Teruo Nishimura

明けましておめでとうございます。私としては、皆さまと共に無事な年越しの祝辞を申し上げたいところではありますが、残念ながら現在喪に服している際でございますので、ご祝辞は遠慮させていただきます。どうぞこの点、お許しをお願いいたします。それは申すまでもなく、去年八月に当会長松前重義先生が亡くなられたからであります。

思えば一九六七年のことです。もう二十五年も前のこととなりますが、スウェーデン社会研究所設立の案が生れて、私もその設立に参加致しました。その際にトップとして会長を松前先生に、理事長を大平正芳先生をお願いすることになり、両先生のご快諾を得て、研究所は発足したのであります。そのとき私は、計らずも所長に就任致しました関係上、両先生とは個人的にも非常に親しくさせて頂きました。それだけでなく、研究所も長きにわたって筆紙に尽くせぬ御指導とお世話を頂いてきたのであります。然るに、昭和五十五年には大平先生の訃に遭い、しばらくは松前先生がその席を継いで下さいました。そして、先生の意向で私が理事長の任に就くことになりました。

当時、松前先生は非常にお元気であらせられましたので研究所は、先生の下でつつがなく活動を続けることができたのであります。

さきに申し上げましたように、研究所は松前先生に筆紙には尽くせぬお世話を頂き事業を継続し

て参りました。先ず、資金のあまり豊でない研究所のために丸ビルにあるご自分の事務所の使用を許して下さいたことは、最も重要な、そして私共にとっては非常に感謝に耐えない恩恵の一つであります。

先生はお若い時から、デンマークに格別の関心と厚意を持っておられました。その気持は自然とスウェーデンその他のスカンジナビア諸国に及んでおられました。先生が当研究所の設立のみならず育成にも大変な援助を惜しまれなかったことは、このことと大いに関わりがあると思います。

いま世界は大変な激動期にあり、日本もそのなかで、如何に生きてゆくかについて模索に苦しんでいます。スウェーデンは、独特のいわば第三の型の国作りに成功してきた国として、わが国に多くの参考を与えてきました。わが研究所の存在の意味もここにあるとわけあります。また、スウェーデンもこの世界の激動のなかで、いろいろの苦しみを味わっているようです。

わが研究所の活動意義は益々大きく、我々が新たな緊張を覚えているときに、いま松前先生を失ったことは痛恨の極みではありますが、幸い新会長に、ご令息の松前達郎先生をお迎えすることができ、心を新たにして、使命の達成に邁進致したいと思っております。心より松前重義前会長の御冥福をお祈りしますと同時に皆さまのご隆昌を祈ります。

研究所事務局
日瑞基金理事

堀内六郎氏の逝去を悼んで

スウェーデン社会研究所及び日瑞基金の事務局を一手に引き受けてられ、日瑞基金の理事もされていた堀内六郎氏が、去る12月17日に急逝されました。

あまりにも突然で思いもかけないことに、事務局一同深い悲しみに包まれて居ります。

堀内氏は、ほぼ20年にわたって、スウェーデン社会研究所・日瑞基金の両機関の事務局の活動を支えられてこられました。この間、陰ながらいろいろなご苦勞があったと思われま。しかし、いつも何気無い心配りを周りになさりながら、地道な事務局の仕事に取り組み、活躍されてこられました。現在に至るまでの長い年月、両事務局は堀内氏の大きな助力によって支えられてきたと申せましょう。今更ながらその仕事ぶりとお人柄とがしのばれてなりません。

ここに永年にわたるご尽力に厚く御礼を申し上げますとともに、慎んで御冥福をお祈り申し上げます。

Season's Greetings

Mrs. Carola Tham

Press and Cultural Attaché, Royal Swedish Embassy

I take the pleasure in greeting the members of the Japanese Institute for Social Studies on Sweden and Wishing you all a prosperous New Year. During many years JISSS has pursued its various activities, centering on publishing, language classes and academic exchange. JISSS plays an important role in expanding the good relations existing between our two countries.

The excellent relations between Sweden and Japan have been strengthened during this past year. The official working visit of the Swedish Prime Minister Ingvar Carlsson in March in connection with the inauguration of the new Swedish Embassy compound have been culmination of these relations.

It is my hope that during 1992 we will further strengthen the excellent relations existing between Sweden and Japan and establish new venues of contact between our two countries. Let me finally – on behalf of the Swedish Embassy – extend our best wishes to all members of JISSS and wish you all success for the coming year 1992.

1992. 2. 21.

社団法人スウェーデン社会研究所

会員各位殿

拝 啓

皆様には益々御盛栄ののことと存じます。

さて、本日送付致しましたのは、月報新年号の訂正版です。

先にお送り致しましたV. 1. 24 No. 1号に誤植がありました。

皆様には大変ご迷惑をお掛け致しました。

本当に申し訳ございませんでした。

また、お手数とは存じますが、前回お手元に届いております号を廃棄下さいますようお願い申し上げます。

今後ともどうか宜しくお願い申し上げます。

敬 具
事務局

前駐日スウェーデン大使

オーヴェ・ヘイマン閣下の離日に当って

Sayonara! Ove Heyman. And see you again.

常務理事 早稲田大学・教授 岡沢憲芙
Prof. Norio OKAZAWA

約6年間にわたって駐日スウェーデン大使として意欲的な活動を展開されたオーヴェ・ヘイマン氏が1992年1月5日付きで辞任されました。氏の日本での活動についてはご存じの方も多いと思います。精力的に日本の各地を回り、日本社会に入り込み、人脈交差点として多くの人びとに出会いの場を提供されました。私たちが魅了したのはその誠実な人柄だけではありません。深い学識と洞察力、それにその場にいる者を少しでも和ませようとされて連発される素敵な微笑みも私たちにとって大きな魅力でした。

1931年10月1日にストックホルムで誕生されましたので、今年61歳になられます。スウェーデン実業界で大きな影響力を持つストックホルム商科大学を卒業された後、57年に外務省に入り、57年から60年までのジャカルタ勤務の後、パリ、ニューヨーク、などで外交官として活躍されました。75年から78年までザンビア大使を勤められた後、本国に戻り対外貿易委員会の要職を勤められ、86年に駐日大使として赴任されました。

大使官邸や大使館での会食やパーティでお会いする度に、温かいスマイルを絶やすことなく重要な問題を爽やかに処理されている姿勢に感動を覚えたものであります。在任中には、国王ご夫妻の



来日や頻繁な文化交流、イングヴァール・カールソン前首相や穏健統一党党首カール・ビルト瑞首相の来日、それに何と言っても大使館の建設。それぞれのシーンの中で大使が演じられたスマートな役割がいまさらながら思い出されます。名大使というフレーズはオーヴェ・ヘイマン氏のためにあるのでしょうか。これからのご活躍と、大使が最も切望した日・瑞関係の強化を心から希望いたします。

ノーベル賞九十周年記念祝典の周辺

ストックホルム在住 フォン・オイラー 三根子

Mrs. Mineko von Euler-Chelpin

早々と夕闇に被われるストックホルムの十二月。暖冬の今年、雪明かりを欠く街は、アーケードやショーウィンドウ、戸外のクリスマスツリーの照明を一層極立たせる。急ぎ足の買物客が行き交うが、売らんかなの大声も騒々しいミュージックもない。一見いつもと変わらない、じーんと重い暗闇。しかしその底に白熱の活気を秘めて、静粛と格調のもとに繰り広げられる行事が一九九一年のノーベル週間なのである。

ノーベル週間とは言うがすでに十二月始めに到着する受賞者もあるし、公式の行事は受賞式翌日の王宮での国王主催の晩餐会まで続くから、七日間に限られない。いや、創立九十周年を迎える今回の学術及び芸術の祝典は、実は二年以上も月日をかけて準備が整えられていたのである。それは今回の記念晩餐会用に特別注文された、手造りのディナーセット、グラス、テーブルクロス等をみてもわかる。スウェーデンでも伝統工芸の将来は危ぶまれ、腕のある職人が少なくなりつつある今、百周年を待たずに特注された品の数々は、どれをとっても美しく堅牢で合理性を強調した物ばかり。まさに練磨されたスウェーディッシュ・デザインの神髄と言う外はない。無駄のない美しさの一言につきる。これは接待、スタッフの働きぶりにも通じる。グランドホテル内のノーベルデスクにも、派遣員用のプレスセンター、王立アカデミーや他の関係機関には、数ヶ国語を話す、種々の能力を持ったスタッフがいて、実にさわやかに接待している。

九十周年記念祝典とノーベル週間に催される講演会、シンポジウムの数々に出席するために招待されたのは歴代の受賞者と本年の受賞者を合わせて百三十人以上。もちろん夫妻を招待するしきたりだから、来賓全ての宿泊、会食、接待のプログラム、送迎用の車等のアレンジは巨大な事業にまでふくれあがる。スウェーデン各地の大学や学術

研究所だけでも、北はルレオ、南はルンドまで約十四ヶ所、ノルウェーを含めると二十ヶ所近くでシンポジウムや講演会、記者会見が行われ、特に並行して催される色々の行事のタイミングを合わせ、観光や大使館主催の夕食会等々、いつも秒読みのスケジュール。実にハードな一週間である。一九八一年、経済学賞受賞のトービン教授夫人（アメリカ）曰く、「今回の主人のスケジュールときたら……。自分の受賞の時はこれほど忙しくありませんでしたよ」と嘆息する声もあった。夕食会はほとんどが合理的なビュッフェ式で、誰もが好きな時間をかけて、自由に席や会話の相手を選んで楽しめるようになっているが、皆自分の受賞時より年を取った事をつい忘れて、興味深い話題の数々について話が弾み、どの行事も思ったよりもタフになるらしい。どの催しも真に世界のトップ頭脳の間窓会という雰囲気である。

同窓会にはつきものの欠席者も実は幾人かある。ほんの一週間前に心臓発作で他界したとか、九十二才という高齢ながら出席を承諾したものの急病に陥って参加出来なかった例などなど。再会の喜びも大きいのが、不在の友を案じる声も交じる。学派、国境を越えて心の通じあう瞬間は多い。御老体どうし、いたわるように次の目的地に向かう学者の一群はまことになごやかな光景なのだが、さすがに落ちついた担当官も時には額に汗し、小走りに近い奮戦の模様である。時間厳守が鉄則のノーベル賞式典及び行事。いかに衰えのない鋭利な頭脳の持ち主でも、動作は自らゆったりとなり、レディスプログラムに連れ出される夫人連と、別の学術行事に運び去られる学者の中には、夕食にそなえての着換えの打ち合わせもしないままに、わかれわかれにという事もある。観光中に足をくじく御夫人も出たりする。さすがの大学者もうろたえ、来賓仲間の力づけに我を取り戻す風景もみられる。ノーベルデスクの担当官が付添ってカロ

リンスカ病院の救急病棟へ車を走らせる。テキパキとした処置にほっとした人だかりが散ってゆく。静かなドラマ的一幕。「同情」、「思いやり」の輪が広がり、北欧の深い闇を透明にしてしまう。

しかし今大きく揺れ動く世界の不安は何人をも無関心にはしておかない。東欧での動乱、ソビエトの崩壊はノーベル週間のまっ直中。九十周年記念コンサート中にスウェーデンに伝わり、大きな衝撃を与えた。来賓の中には東欧やロシアを先祖ゆかりの地とする学者も多い。一九七三年経済学賞を受賞したレオンチェフ教授はそのうちの一人。温厚で慈愛に満ちた眼差をことの外うるませ、「アメリカへ帰国する途中に生まれ故郷の聖ペトロブルグへ立ちよって旧交を深めるつもりです。レニングラードから元の名前に戻った旧ロシアの首都だった街で、そこにはアルフレッド・ノーベルも住み工場を建てたという。何とも縁の深い都市と思いませんか？」と夢みるような口調で話していた矢先の事である。一体どんな心持ちで出発されたのか。彼の他にもユダヤ系の受賞者は多い。国を憂れう参加者は数え切れない。今年度の平和賞受賞者のスー・チー女史、文学賞のナディーン・コーディマー女史等々。コーディマー女史には国会議事堂で行われたノーベル大討論会(デビット・フロストの司会で世界三十ヶ国に新年に放映される予定)で言葉を交わす機会を得たが、厳しさを秘めた美しい顔立ち、小柄ながらも鋼鉄の強さを感じさせ、ジャンヌ・ダルクが長生きしたらこういう感じになるのでは、と一瞬思った。文学は社会や政治とは切り離せないとは言え、「スウェーデン到着直後の記者会見で受けた質問は政治的内容ばかりで文学に関するものは皆無だった。」と指摘し、日本については「私の作品で日本語に訳されたのはたった一作だけ。日本人はそんなに無関心なのかしら。」と手痛い一言。島国から見る世界の視覚に片よりがあることが痛感される。今ではさすがの日本でも彼女の作品の翻訳権獲得戦は終わっているだろうけれども。

コーディマー女史は行く先々で注目を浴び、ス

ウェーデンアカデミー主催の文学シンポジウムにもジョセフ・ブロスキー、オクダヴィオ・パズ等と出席したが、満場一致の文学賞受賞者という彼女の尊敬の念は高まる一方。ノーベル大討論会のテーマである「人類の未来にとって科学の進歩は役になるか、害になるか」という論議中にも、彼女の投げかけた問いは満場の拍手を促した。それは、自然科学と、人文学(文学)はなぜいつまでも相反するものという立場を取り続けるのか。なぜ歩みより、手を差し延べようとししないのか」という疑問であり、現在人類の直面している数々の大問題は、差し延べる手を受けとめ得ないことに帰する事を鋭くついている。私は、ミケランジェロの描いた天地創造の図が、頭にひらめく。アダムの延べる手の指先と創造主の指先が今にもふれ合うばかりに近づいているのではないかと。

今、貧しい国と富める国の格差が広がっている。人と人との疎外も甚しい。悲惨さの度合の大きさは人間の努力の矮小さをさらけ出し、私達を無気力にしてしまう。しかし、この大討論会の結びの言葉として平和賞受賞者、デズモンド・ツツ司教の言葉は、より良い未来への希望を与えずにはおかない。「現状に満足したり、あきらめてしまっただけは人間はおしまいである。これではいけない。私が生まれて来たのは、こんな風に一生を終えるためではない。このままではいけない。と思う者がある限り、そして非難の声がある限り、人類には未来がある。」と。

日本もスウェーデンも富める国と言われる。貧しい兄弟、助けを求める隣人は多い今、「差し延べる手は空いていますか? 差し延ばされる手をしっかりと受けとめる手が空いていますか?」と尋ねられたら、「もちろん、ほら、」と差し出してみせられるだろうか。それとも、オモチャ箱をかかえる子供のように、車やファミコンで両手ともふさがり、出せるのは舌だけなのだろうか。自己の心のあり方、生活の姿勢を強く問い直さずにはおかない、一九九一年のノーベル週間であった。

不景気と人種差別

Racism in a Hard Time

三瓶恵子

Ms. Keiko Kjellsson-Sampe

このところスウェーデンではあまり明るい話題がない（社民党嫌いの人にとっては政権交替は嬉しい出来事だったかもしれないが）。新政権の具体的政策は本格的には92/93財政年度（92年7月から）になってみないとその効果がわからないが、いずれにせよここ2、3年は経済の急激な回復は望めないとのことだ（大蔵省自身が非常に暗い未来予測を発表している）。

不況とまではいえないにせよ世の中が不景気なのは確かで、そのためか、この灰色の時代に急激に国粹主義的な動きが出てきている。カールソン前首相も国会での演説で国粹主義の人種差別主義者のグループがあちこちで出来てきていることを憂えた。

地下鉄や塀などの落書きでBSSとBSBという「スローガン」がいたちごっこのお互いを塗り潰すのは今に始まったことではないが、最近では圧倒的にBSSのほうが多い。BSSというのは“Bevara Sverige Svenskt”の略で、直訳すれば「スウェーデンをスウェーデン的に保持せよ」となる。これに対してBSBは“Bevara Sverige Blandat”の略で、「スウェーデンを混在として保持せよ」という訳になるだろうか。つまりBSB論者はスウェーデンからスウェーデン人以外のものをしめ出すことを欲し、BSB論者はその反対を望んでいるわけだ。

ここ2、3年移民の家族の家を焼き討ちしたり、政治亡命希望者が滞在許可がおりるのを待つ間暮らす施設に手製の爆弾が投げ込まれたりする事件が相次いでいたが、最近では外国人の容貌をしているというだけで無差別に5人が殺されるという連続殺人事件が起り、社会を震撼させている（犯人は未だつかまっていない）。これを契機に国粹主義の人種差別反対の全国的キャンペーンが開始されている。

移民がいるから景気が悪くなるというのは言いがかりだろう。現に1988年をピークに移民数が急激に減ってきており、その原因はスウェーデンが景気が悪くなったので移民を引き付ける魅力がなくなっているからだと分析されている（DN紙91年11月17日付け）。

国粹主義の人種差別論者に移民が目の敵にされるのは、「順番待ちの必要なく住宅を手に入れ、生活保護や各種補助金を受け、仕事もせずのうとうと学校に通って国民の税金を食い潰している」というふうにみられているからだ。政治亡命者の受け入れは各市に割り当てられ、市では優先的に住むところや教育を提供する義務があるが、それらは移民全体のうちのごく僅かである。それにも関わらず外国人全体を敵視するのは結局のところ、自分の経済状態に対する不満を自分とは異なる外見や背景をもった人々のせいにする事にあるのではないだろうか。

マス・メディアなどでは、「この人達も『移民』です」という特集をして、各界の有名人の写真を掲げ、スウェーデンが移民を暖かく受け入れてきた国であることをアピールしている（一番大きい写真はもちろんドイツからスウェーデンに「移住」して来たシルビア王妃である）。

高福祉社会として世界的に名が売れていたスウェーデンも、あまりに「手を広げ過ぎた」ためか制度が硬直して息も絶え絶えになってしまったかの感がある。社会が疲弊すると人々の心も荒廃してしまうのだろうか。これからの数年は制度の立て直しをしなければならぬスウェーデンにとって試練の時代となるだろう。スウェーデン人とスウェーデンに暮らすスウェーデン人以外の人々にとっても、自分達が何を望むのか、そのためにはどのような社会を築いていけばよいかを一人一人が自問自答する必要に迫られるだろう。

スウェーデン、欧州経済領域への合意を歓迎

スウェーデンの欧州問題担当相ウルフ・ディンケルスピール (Dif Dinkelspiel) によれば、10月22日に、EC及びEFTAの閣僚間で合意に達した欧州経済領域条約の原文は、スウェーデンにとって、ヨーロッパ統合に近づくための重要なワンステップであるという。同氏は前任のスウェーデン首席協議者に就任した時から、交渉に参加してきた。

新条約に基づき、今後7つのEFTA加盟国と12のEC加盟国により、製品、サービス、資本、労働力の流通が自由な、一大西欧市場が形成される。なお、同条約には他の幾つかの分野の協調に関する内容が含まれるものと見込まれる。

ウルフ・ディンケルスピールによれば、スウェーデン社会全体にとって、極めて重要なのは幾つかの新分野における次の4つの自由並びにECとの協調であるという——労働市場、教育、環境保護、研究開発——。これは、すなわち、スウェーデンの商工業が今後ヨーロッパ市場で、同じ条件で競合でき、それが消費者により一層の選択の自由を与えるということの意味する。(SIP 318/91)

ストックホルムに開設した世界初の生態経済研究所

9月16日に、世界初の生態経済研究所がストックホルムの王立科学アカデミーに開設された。新組織は1977年来エネルギー及び人間生態学の問題に取り組んできた同アカデミーのベイエル研究所 (Beijer Institute) の優先事項が変化した結果、創設されたものである。なお、これらの研究は既に、ストックホルム環境研究所に移転された。

新研究所で研究される主要プログラム分野は二つあるが、そのうちの一つは生物学的多様性についてで、リストアップされている事項としては次のようなものがある。熱帯雨林破壊の影に働いている推進力と何にか——不適切な所有権、誤った農業政策、あるいは誤った税制であろうか——。生物学的多様性の減少の根幹にある決定的要因とは何か。生物学的多様性を保存することはいかなる価値があるか。

もう一つのプログラム分野は生態系モデルと経済システムの数字モデルとのつながりに関してで、「明らかに不可能な作業」といわれてきた。従来モデルが極めて短いスパンしかなかったために、とりわけ解決が不可能だといわれていたのであるが、生態モデルが将来にまで分析を拡張することを可能にした。スウェーデンの研究スタッフはまた生態的、経済的観点からバルト海への窒素流入を説明する要因を調査する予定でいる。

ベイエル国際生態経済研究所の代理所長は、ストックホルム大経済学部教授のカール・イェーラン・メーレス (Karl Goran Maler) である。(SIP 274/91)

工業の景気交代、第3四半期にさらに悪化

国立経済研究所の季刊経済動向指標調査によると、スウェーデン工業は深刻な景気後進期にあり、この下向き傾向は過去数年にわたり、国内市場において、最も顕著であったという。受注量は第3四半期に、さらに減少し、全体の3分の一の企業が減産を報告した。また、在庫の故意でない蓄積も止まったように思われる。

予想されたように、雇用は急速に減少し、雇用の削減を報告した企業数は、これまでの同様の調査データ中最も多く、ホワイトカラーのみならずブルーカラー労働者の間でも、マイナス成長の傾向が顕著である。国内需要は著しく減ったが、これは価格傾向によって明確に指示されている。過去2年にわたり、価格減少が価格上昇より、一般的傾向にあったが、これは国内市場においてはかつてなかったことである。

第4四半期に関して、企業予想及び生産計画は第3四半期に比して、さらに抑制されており、動向指標報告は、明らかに、労働市場状況がさらに悪化することを示している。(SIP 304/91)

1. 18 スウェーデン語講習会 (74回目) 開講
3. 7 日瑞基金創立20周年記念式を三井クラブで開催 (駐日スウェーデン大使臨席)
 - 27 政治問題研究会開催 (講師) 武田龍夫 北海道東海大学教授 (テーマ) 最近のスウェーデンの外交について
4. 10 スウェーデン語講習会 (75回目) 開講
5. 21 日瑞基金派遣研究員の面接選考実施 (4名合格)
6. 5 スウェーデン社会研究所の平成3年度通常総会開催 (於、東海大学交友会館)
 - 25 日瑞基金の平成3年度通常総会開催 (於、三井クラブ)
7. 1 スウェーデン語講習会 (夏期講習) 開講
8. 25 会長松前重義氏逝去
9. 9 スウェーデン語講習会 (76回目) 開講
 - 24 外務省へ スウェーデン社会研究所及び日瑞基金の概況調査票を提出
10. 5 村角泰駐スウェーデン大使がブラジル大使に転任、後任に熊谷直博氏就任。
10. 15 マスコミ倫理問題研究会 (講師) 潮見憲三郎研究所理事 (テーマ) 報道と名誉・プライバシー
- 22 ストックホルム商科大学日本研究所設立募金委員会主催、アカデミックフォーラムにて岡沢憲美研究所常務理事講話
- 23 政治問題研究会開催 (講師) 岡沢憲美研究所常務理事 (テーマ) スウェーデン議会の選挙結果の分析
11. 5 政治問題研究会開催 (講師) 岡沢憲美研究所常務理事 (テーマ) カール・ビルト政権の課題
11. 19 日瑞基金の東京倶楽部への補助金申請に関する最終補足資料を
12. 7 当研究所の次期会長松前達郎氏と西村理事長会議
12. 17 研究所事務局、日瑞基金理事 堀内六郎氏逝去

事務局より

賀 正

本年も本誌のご愛読とご寄稿などご後援をお願い申し上げます

目 次

新年の御挨拶	西村光夫	1
Season's Greetings		
……………	カローラ・タム報道官	2
前駐日スウェーデン大使		
オーヴェ・ヘイマン閣下の離日に当って	岡沢憲美	3
ノーベル賞九十周年記念祝典の周辺		
……………	フォン・オイラー 三根子	4
不景気と人種差別	三瓶恵子	6
<SIPニュース>		7
平成2年研究所活動メモ		8